

古代銀錢に関する一試論

顯宗紀の銀錢記事を中心として

中 江 圭

はじめに

平成十年に奈良県の飛鳥池遺跡で発見された富本銭が、和銅年間以前の国内鑄造品であることが判明し、従来の貨幣史観にも再考の必要が出てきた。⁽¹⁾これにより『日本書紀』(以下『書紀』と略す)天武十二年四月壬申条の錢貨の記事、「自レ今以後、必用ニ銅錢」。莫レ用ニ銀錢。」(以下「天武十二年貨幣令記事」と称す)に関心が集まった。しかし『書紀』における錢貨の記事の初出は、顯宗二年十月癸亥条「宴ニ群臣ニ、是時天下安平、民無ニ徭役ニ、歲比登稔、

百姓殷富、稻斛銀錢一文、馬被レ野。」(以下、「顯宗紀銀錢記事」と称す)に遡る。

これは、顯宗天皇の時代が後漢の明帝の治世のように豊かで平和であつたことを表現するため、『後漢書』明帝紀の一文、「是歲天下安平、人無ニ徭役ニ、歲比登稔、百姓殷富、粟斛三十、牛羊被レ野」(永平二年条)を模倣して書いたものである。この記事の内容の信憑性については、それを立証するものがなく、現在ではこの記事は、事実の伝えとは認められていない。また、記事そのものが貨幣史研究の対象外という感がある。

しかしこれを『書紀』の編纂された時代、つまり八世紀

はじめの中央政府の貨幣史觀の反映した史料として利用することは可能である。本稿では、改めてこの記事に注目し、貨幣草創期の貨幣史について論じることしたい。

1、内田銀蔵以来の先行研究の整理

『書紀』における錢貨および銀錢の登場は、前出の顯宗紀銀錢記事と天武十二年貨幣令記事のみである。先行研究で論点となったのは、主として顯宗紀銀錢記事では内容の真偽、天武十二年貨幣令記事では錢種である。今日、これらの問題はほぼ決着しており、顯宗紀銀錢記事は修飾目的の作文で、天武十二年貨幣令記事の「銅錢」「銀錢」の錢種は、和銅年間以前の和同開珎の鑄造が確認できないので和同開珎とする説は成り立たず、「銀錢」については、近年発見の相次ぐ無文銀錢とする説が一般的である。²⁾

また和銅以前の錢貨の使途も、かねて問題とされており、現在も通貨説と、厭勝錢および通貨機能否定説とに見解が分かれているが、これに関しては後述する。結論のみを述べるならば、顯宗天皇の時代に銀錢が流通していたという設定の作文がされている以上、天武十二年貨幣令記事の錢

貨が、通貨としての錢貨を指していることは明らかであり、和銅以前の錢貨の通貨機能は存在していたと考える。

古代錢貨の研究は、江戸時代から古錢学として盛んに行なわれていたが、現在の日本の錢貨研究は、内田銀蔵に始まったといえる。³⁾ その業績は、今日にも大きな影響を及ぼしている。顯宗紀銀錢記事についても内田の解釈が通説となっており、後続の研究者、たとえば西村真次や永貞三、最近では榮原永遠男、今村啓爾などが、内田の説を支持している。⁴⁾

内田の説を要約すると、以下の通りである。

記事の真偽については、当時、通貨が通用した確証が無いため、史実としては認められない。また文中の「稻斛銀錢一文」という部分は、『後漢書』の「粟斛三十」(この「三十」というのは、銅錢三十文を意味する)の銅錢を銀錢に書き換えているが、これは日本の和銅以前の錢貨事情銀錢が銅錢に先行していたを反映したものである。和同開珎発行に際し、銀錢の鑄造が銅錢に先行したこと、また天武十二年貨幣令で銅錢を必ず用いるように命じた際には、銀錢の使用を禁止していること、これらも和銅以前の錢貨事情をうけた結果であると考えられる。

この内田の説を受け、その後、顕宗紀銀銭記事の史実性を否定する説は強まってくる。大正時代には山中笑、昭和初期には西村真次、戦後は弥永貞三などが、いずれも否定的立場をとっている。⁽⁵⁾そして、昭和四十年代になると、妹尾守雄が否定説を通説とするまでになっている。⁽⁶⁾

なお昭和二十九年には、田中卓も顕宗銀銭記事の問題を扱っているが、その論点は記事の内容の真偽ではなく、成立時期におかれている。⁽⁷⁾田中は、本文中の「稲一斛」銀銭一文を安価とする価格の設定には、記事の成立時期の物価感覚が反映していると考え、記事の成立は銀銭が公用されていた時期、和銅元年五月から翌年の八月以前、だとしている。

この田中説を受けた弥永は、顕宗紀銀銭記事の成立時期の物価感覚が反映している点は認めながらも、銀銭の公的使用の禁止されていた最中でも記事の成立した可能性があるとしている。そもそも銀銭の公用の禁止ということは記事の成立時期を限定できるようなものではない。むしろ、記事の成立は『書紀』の完成した養老四年という可能性がある。というのも、『書紀』の「銀銭一文」は、『後漢書』の銅銭「三十」文を書き換えたものであるから、ここでは

銅銭三十文が銀銭一文と等価で扱われていることになる。三十対一という交換比率の値は、養老五年の公定交換比率二十五対一に近く、養老四年当時の認識が反映した可能性がある。

確かに弥永の主張する通り、田中の論法には、疑問がある。しかしまた、弥永の論も養老四年時に稲と粟が等価であるという前提がなければ成り立たないものである。

あえて記事の成立時期を限定するならば、記事のなかの計量の単位が斛斗であることから、上限が大宝年間を遡ることはまずないと考えられる。下限は、『書紀』の撰上直前の養老四年である。なお、この記事の成立が『書紀』の撰上直前であったとするならば、その時、銀銭の公的使用は禁じられているから、稲一斛「銀銭一文」を安価とする銭貨価値は、当時の銀銭の非公式な市場での実勢取引価格に基づいたもの、もしくは過去の銀銭の公認されていた時期の物価感覚の反映したものということになるであろう。

2、顕宗紀銀銭記事の作文の背景

通説通り、顕宗紀銀銭記事が史実性に欠ける内容である

ことは明らかであるが、『書紀』編纂時には、これを史実と見做せるような貨幣史観が存在していたものと思われる。なぜならば、『書紀』においては、顕宗天皇の時代には、錢貨流通を可能とする条件が全て備わっているように書かれており、また内容的にも他の記事内容と抵触していないからである。錢貨流通の要件としては、錢貨の使用の場の存在、市の開催、また材料の調達、加工があげられるが、『書紀』における顕宗天皇の時代は、こうした条件をすべて満たしている。

『書紀』の市の初見は雄略紀の餌香市だが、この市は顕宗即位前紀にも登場する。顕宗即位前紀には、石上市辺宮という宮も登場し、また武烈即位前紀には海石榴市が登場する。当時、畿内には複数の市が存在したと考えられていたことがわかる。

また銀錢材料の銀は、『書紀』では天武三年が始産とされているから、顕宗天皇の時代の銀錢は、輸入銀を用いたものということになる。⁹⁸『書紀』での渡来人の大量流入は応神朝とされているから、顕宗天皇の時代に銀が持ち込まれていたとしても不自然ではない。

加工技術については、鍛冶技術集団である忍海氏を通し

て説明できる。⁹⁹ 顕宗即位前紀には、顕宗天皇が幼少期に播磨国赤石郡に避難していた際、縮見屯倉首の忍海部造細目に仕え、細目の新室祝いの酒宴がきっかけとなって宮中に戻ったという伝承が載っている。そして清寧天皇の死後、顕宗天皇が皇位を継承するまで葛城忍海の高木角刺宮で政務を執っていたとされる忍海部女王は、顕宗天皇の近親者である。顕宗天皇と忍海は関係が深く、顕宗天皇が忍海氏に命じて銀錢を造らせたことをも想像させる。

以上のことから、『書紀』の史観においては、顕宗天皇の時代の銀錢流通は整合性のあることと見做すことが出来る。しかしながら、銀錢の記事が顕宗天皇の時代に挿入されたのは、通説で言うような単なる修飾作文の結果というよりも、明確な意図に基づいた結果と見るべきであろう。

つまり、この記事が作文された真意というのは、錢貨の歴史的価値を保証するためと考えられるのである。元明天皇の時代の錢貨政策は、錢名「和同開珎」の「和同」と当時の年号「和銅」が同音で通じていることから、きわめて重大な国家的問題であったと思われる。『書紀』編纂者が、不用意に錢貨の記事を登場させたとは考えにくい。顕宗紀に銀錢記事を挿入したのは、それによって日本の銀錢

および錢貨の來歴を示し、現行の錢貨の使用に対する信用を高めようとしたものと考えられる。

前述した通り、『書紀』の銀錢の記事は顯宗紀と天武紀の二箇所のみで、その間には銀錢の記事は一切無く、これは意図的とも思われる。例えば宣化元年五月の詔だが、ここでは食の重要性を説く際に「黄金万貫、不_レ可_レ療_レ飢」「白玉千箱、何能救_レ冷」と、豊かさの象徴に黄金と白玉が登場しているが、銀錢については触れていない。

これは、宣化天皇の血統に原因があるようにも思われる。宣化天皇の女の石姫皇女は敏達天皇の母であり、敏達天皇は天武天皇や元明天皇の直系の尊属にあたる。後述する通り、天武天皇と元明天皇は銀錢禁止政策をとっている。宣化天皇が銀錢を使用していたとすれば、銀錢禁止政策の正当性を損なうことになりかねない。

さらに銀錢禁止政策の正当性を守るという観点からすると、時代の近い天皇のところに銀錢記事を載せるのも不適切である。用明天皇、崇峻天皇、推古天皇の時代がこれに該当する。銀錢の使用は、むしろ遠祖の時代、具体的には血統の繋がりの薄い継体天皇以前が望ましいこととなるであろう。

以上のことから、銀錢の記事を挿入するのに適しているのは、金工技術集団の忍海氏を掌握した後で、かつ継体天皇以前の血統の断絶している天皇の時代ということになる。この条件をすべて満たすのは、顯宗天皇と武烈天皇の時代だけである。しかし『書紀』における武烈天皇は、暴虐な悪帝として描かれている。銀錢は天武天皇や元明天皇の禁止政策にみるように、常に使用を奨励できるものではないが、その反面、豊かさや平和の象徴という一面もある。武烈天皇の時代に、錢貨の歴史的価値の保証を託すことは出来なかったであろう。

一方の顯宗天皇は、生前皇統断絶の危機を救い、為政者としての優れた資質を持ち、後漢の明帝に比せられるような良政をしいていたとされる。さらにその即位は、資質をかわれて兄に先じたものとされる。このような資質優先による皇位継承の例は、必ずしも順当とはいえなかった。天武天皇の皇位継承の正当性を主張する上で、都合の良い存在であったと考えられる。しかも顯宗天皇には、皇室の危機を救った優れた為政者、兄弟天皇の弟、苦勞の末の皇位継承など、天武天皇との類似点が複数指摘できるのである。要するに、顯宗天皇の時代の銀錢の登場は、従来指摘さ

れていた単なる修飾目的の作文ではなく、種々の錢貨流通の要件を満たしていた時代であった上に、『書紀』の描く顯宗天皇の為政者像が、錢貨來歴の一端を創出する上で、きわめて都合よい存在であったからである。

さて、古代の銀錢の錢種には、無文銀錢のほか、和同開珎銀錢、太平元宝、賈行錢がある。このうち和同開珎銀錢は和銅に遡る出土事例はなく、通説では『続日本紀』の記載に従い、和銅元年初鑄とされている¹¹⁾。また太平元宝は、現存品はないものの、『続日本紀』に天平宝字四年の初鑄であることが明記されている¹²⁾。無文銀錢と賈行錢は初鑄の時期が不明であるが、賈行錢については完形品はなく、部分残存品が奈良時代の遺物として一例あるだけであり、文献にも一切登場していない。賈行錢の錢貨としての実態は不明であり、奈良時代を遡る証拠もない¹³⁾。

以上のことから、『書紀』に登場する銀錢は、無文銀錢を想定して書かれたことになる。無文銀錢の外観は、直径3センチほどの円形有孔で、古墳や祭祀遺跡の遺物に見られる石製円板に類似している。完形の重量は、10グラム前後に揃えられた感がある。出土品の中には錢面表面に銀小片を付着させているものもあり、重量調整をしたことが窺

われる。製造方法は一見単純な打圧と思われるが、工程の一部では鑄造も行なっている¹⁴⁾。

出土の状況は先行研究で既に整理されているが、傾向としては畿内とその周辺に限られ、なかでも飛鳥とその近辺と琵琶湖湖西に集中している¹⁵⁾。遺物の推定年代は、古いものは七世紀後半に遡る。天武天皇の時代には、中央地域ではある程度銀錢の普及していたことが想定されるのである。さらに、顯宗天皇の時代に既に銀錢が存在したという『書紀』編纂者の主張は、七世紀後半以前に銀錢が存在した事実から生じた可能性も考えられるであろう¹⁶⁾。

無文銀錢の厭勝錢としての使用は、川原寺跡（奈良県明日香村）や崇福寺跡（滋賀県大津市滋賀里町）など、既に七世紀後半の出土事例から確認できるが、和同開珎の発行前の錢貨の通貨機能については、流通した根拠がないとして否定する向きも多い¹⁷⁾。しかし、素材の銀には貴金屬的価値に基づく実物貨幣の機能が備わっている。その上、法量の均一性が計らわれていることから、名目貨幣として機能することも可能である。そして『書紀』の記述を素直に読むと、銀錢（無文銀錢）は顯宗天皇の時代には既に通貨として用いられ、天武天皇の時代に禁止されたということになる。

『書紀』の編纂の完了は、和同開珎という通貨の発行を経た後であり、『書紀』編纂者は、『漢書』や『史記』といった書物や遣唐使などを通じて、中国からの情報を手で得る立場にいた。当然、「銭」の語の本来的な意味が通貨であることは知り得たものと思われる。そうであるならば、天武十二年貨幣令の「銭」は通貨を指し、この令は通貨の素材の切り替えを命じたものと解釈されるのであり、流通の実態はともかく、和同開珎以前の銭貨には通貨機能が存在したとみるべきである。

3、その後の銀銭

次に、天武天皇以後の銀銭に関する施策を時代順に追っていくこととする。天武十二年貨幣令の史実性は、無文銀銭や富本銭の発見から証明されるものの、その施行の実態は不明である。ただし、文献上からも考古学上からも、和同開珎に相当するような、大規模な銭貨鑄造が行なわれた痕跡は確認出来ない。

銀銭が禁止された理由には、中国で銅銭が使用されていることがあったと考えられる。また銭貨を通貨と見做す立

場からは、政府が新都造営資金捻出の必要から、銅銭の鑄造利益の大きさに期待したことも、その理由として指摘されている。¹⁸⁾ 私見としては、こうした理由のほか、天武天皇の五行五徳思想への信奉もあつたと考える。天武天皇は五行五徳思想の影響から、自王朝を赤色と捉え、赤色のものを重用している。¹⁹⁾ 銭貨の素材も、白色の金属の銀（しろがね）よりも赤色の金属の銅（あかがね）を好んだ、と推定されるのである。

元明天皇の時代になると、和銅元年五月、同年八月開始の銅銭に先行して、和同開珎銀銭の発行が始まつた。和銅二年の正月には、銀地金から和同開珎銀銭への切り替えと銀銭の私鑄の禁止が命じられ、同年三月には、銀銭の高額（四文以上）での使用および銅銭の低額（三文以下）での使用が定められ、銀銭の使用が限定されることとなつた。

天武十二年貨幣令以降、銀の貨幣形態は、銭貨としては非公認となり、地金として存在することとなつた。それが和同開珎の発行によって、秤量貨幣と名目貨幣という二種類の銀の貨幣形態の併存が公認されることとなり、さらに銅銭という新たな貨幣形態も加わる事態となつた。和銅二年の一連の政策は、こうした混乱に伴う対応策と考えられ、

政府は銀の貨幣形態を銀錢に一本化させ、銅錢との併用の実現を考えていたと推定される。

ところが同年八月になると、一転して銀錢は廃止となり、さらに翌和銅三年九月には流通禁止令が出される。二度にわたる発令から、当時銀錢が広く流布していたことや、政府の銀錢排除の徹底的な姿勢が窺われる。また、短期間での銀錢の扱いの変化に伴う市場の混乱も想像される。なお先行研究では、政府には最初から銀錢を永続的に使用させる意図はなく、銀錢の短命は当初からの計画通りであると見られている²⁰。

しかし元正天皇の時代には、また方針が一転する。養老五年に突如、銅錢、銀錢、銀地金の交換比率が定まったのである。しかも翌養老六年には、銀地金の交換比率が改定される。これは、当時の銀には名目貨幣としての貨幣形態と、実物貨幣としての貨幣形態とが併存し、しかも両者の交換比率が不確定だったためと考えられる。

天平宝字四年になると、淳仁天皇が金銭・銅錢とともに新銀錢（大平元宝）を発行する。この新銀錢は、新銅錢との交換比率が一對十と公定されており、実用が考慮されていたとみられる。しかし、実際の発行および使用を裏付け

るものではなく、銀錢の記事はこれを最後に文献上から姿を消す。

以上が政府による銀錢の諸政策であるが、その政策の対象となった銀錢は、和同開珎銀錢だけでなく、無文銀錢も含まれていた可能性がある。というのも、無文銀錢は和同開珎銀錢登場後も消滅していなかったからである。

その根拠となるのが、天平十九年成立の『大安寺資財帳』で、ここには「合銀錢壹仟伍拾參文 佛物八百八十六文 之中九十二文古」と記されている。この「古」と称される銀錢が無文銀錢であり、養老五年以降の銀錢の復活が確認できる。ちなみに併記されている単なる「銀錢」とは、和同開珎銀錢のことであろう。なお、この「古」銀錢を古錢字で言うところの和同開珎の「古和同」にあてる説は成り立たない。なぜなら、古錢字的な製作上の細かな相違による分類は非実用的であるし、しかも識字率の低い当時ににおいては有効な手段とは考えられないからである。

しかし、無文銀錢と和同開珎銀錢という分類は実用的であり、かつ十分な理由がある。両者の平均重量は大きく異なるからである。無文銀錢の平均重量は10グラム、和同開珎銀錢の平均重量は5グラム弱と、実に無文銀錢一枚は和

同開珎銀錢二枚に相当する。⁽²¹⁾ これを同じ一枚の銀錢と扱うことは難しい。なお和同開珎銀錢がこのような重量となつたのは、政府が和同開珎に重量以上の価値を付加させて鑄造利益を得ようとしたためであらう。

無文銀錢が和同開珎銀錢発行後も残存することができたのは、和同開珎銀錢の公的な排除が無文銀錢の和同開珎銀錢に切り替えられる前であつたためと考えられる。和同開珎銀錢の発行および流通の公認期間はきわめて短かく、その発行量も無文銀錢を凌駕するほどではなかつたのである。そして、より根本的な理由として、銀の実物貨幣的価値が既に相当根強く存在したことが考えられる。和同開珎銀錢の適当な法定価値がかえって、定まらなかつたのであらう。

銀錢は、東アジア社会の交易でも通用する銀の貴金屬価値も備えている点で、銅錢とは異なる。極端な場合、律令国家の統制、つまり法定価値が無くても流通は可能である。よつて名目貨幣に慣れていない日本でも、抵抗なく受け入れられ得たのである。しかしながら、こうした銀錢の特性は、一方で政府の通貨の独占的支配を阻む要因になりかねない。元明天皇が銀錢を排除したのも、そのためであらう。

それではなぜ、養老五年に銀錢が再び復活したのであらうか。従来の方針が一転されるようになったその経緯は、以下の通りと考えられる。

まず、和銅七年九月に出された撰錢禁止令が軌道に乗り、二種類の銀錢　和同開珎銀錢と無文銀錢　の併存によつて懸念される撰錢の事態にも対処できる状況が、ひとまず整つていたと考えられる。また鑄造利益の大きい銅錢の投入という本来の目的は、既に果たされている。さらに銀錢の廃禁政策をとつた前帝の元明天皇は、養老五年十二月に亡くなるのであるから、同年一月の銀錢の交換価値が公定された時点では、その政治的影響力が薄れていたと推定される。こうした経緯をもつて、銀錢の再投入が可能になつたと考えられる。銀錢は、禁止されて以後、各自が所蔵していた分は鑄潰して地金として用いないがぎり、死蔵の状態であつたことが想像される。養老五年の銀錢復活は、既に根付いていた銅錢を基準とした交換価値を公定することで、政府の目論む法定錢貨価値を守りながら、眠っていた銀錢を市場に取り込むことを企てたものと考えられるのである。

おわりに

最後に、顯宗紀の記事の成立した時代背景に目を向けてみると、皮肉なことに銀銭は、常に実際の流通事情に反する施策がとられている。流通したがゆえに私鑄や撰銭が横行して、禁令が出され、流通が滞ると禁令の必要もないから無視ということになる。太平元宝以後、銀銭の発行がなくなつたのは、錢貨の実物貨幣から、政府の意図する名目貨幣の銅銭の使用に慣れたからといえるが、その後の銀地金の貴金屬価値、貨幣的使用はどうなつたのであろうか。榮原永遠男は銅銭に吸収されたとして²²⁾いるが、そうであるとする、中世に銀貨が登場するまで、銀の通貨的使用は断絶されてしまったことになるのであろうか。今後の研究の課題の一つとしたい。

註

- (1) 飛鳥池遺跡出土の富本銭については、奈良国立文化財研究所『年報99』が詳しい。
- (2) なお天武十二年貨幣令に登場する「銅銭」については、飛鳥池遺跡で富本銭が出土して以来、富本銭を想定する説

が一般的である。私見としては、開元通宝などの中国銅銭や無文銅銭にあてる旧説も無視できないと考えている。

- (3) 内田銀蔵「日本古代の通貨史に関する研究」(『日本経済史の研究』同文館、大正十三年。ただし論文の発表は、明治三十一年)ほか。

- (4) 西村真次『日本古代経済(交換篇四冊貨幣)』(東京堂、昭和八年)。弥永貞三「奈良時代の銀と銀銭について」(伊東多三郎編『国民生活史研究2 生活と社会経済』吉川弘文館、昭和三十四年)。榮原永遠男「和同開珎の誕生」(『日本古代錢貨流通史の研究』塙書房、平成五年)。今村啓爾「無文銀銭の流通とわが国初期貨幣の独自性」(『史学雑誌』第一〇九編第一号、平成十二年)。

- (5) 山中笑「本邦最初の泉貨に就て」(『考古学雑誌』五卷五号、大正四年)。西村、弥永は前掲、註(4)参照。

ただし、内田の登場によって顯宗紀銀銭記事肯定説が一掃されたわけではなかった。塚本豊次郎「改訂本邦通貨の事歴」(有明書房、復刻版は昭和五十八年、オリジナルは昭和三年)によれば、従来、顯宗紀銀銭記事は、肯定的に解釈されており、塚本自身も、これを以て日本の金屬貨幣の濫觴だとしている。なおこの当時は、『和漢三才図会』を論拠として、反正天皇の時代に金銀銅の錢貨が存在したとする説もあったという。

- (6) 妹尾守雄「皇朝錢時代」(『図録日本の貨幣』(1)原始・古代・中世)『東洋経済新報社、昭和四十七年)。

(7) 田中卓「銀錢」、『続日本紀研究』一卷九号、昭和二十九年。

(8) 天武三年三月丙辰条に「対馬国司守忍海造大國言、銀始出_二于_一当國」。即貢上。由_レ是、大國授_二小錦_一下位_一。凡銀有_二倭國_一、初出_二于此時_一。(以下略)とある。

(9) 忍海氏が鍛冶技術集団であることは、天武三年の国内初の銀の発見者が忍海造大國であること(『書紀』天武三年三月丙辰条、註(8)参照)、久米皇子の新羅征伐の兵器製造をしたのが忍海漢人であること(『肥前国風土記』三根郡漢部郷条)、大宝元年の治金の命をうけた三田首五瀬の出身が大和国忍海郡であること(『続日本紀』大宝元年八月丁未条)、丙辰年(推古四年)の飛鳥寺の作金に意奴弥(忍海)首名辰星が従事したこと(『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』)などからわかる。

(10) この詔に「銀錢」を登場させることは、文の内容上からも問題がある。この部分の文意は、食品は生命維持に直結し、貴重品の「黄金」「白玉」のような非食品に勝る、ということである。よって、ここに「銀錢」を登場させると、錢貨の不可食性による劣性を公認することとなる。しかしいずれにせよ、ここでは当時の錢貨政策に反するような記述を意図して避けた観がある。

(11) 和銅元年五月壬寅条に「始行_二銀錢_一」とある。

(12) 天平宝字四年三月丁丑条に「宜下造_二新様_一、与_レ旧並行上」。(中略)銀錢文曰「大平元宝」とある。

(13) 實行錢について言及した先行研究としては、弥永(前掲論文、註(4)参照)の他、次のものがある。利光三津夫「神功錢鑄造をめぐる史的背景 皇朝錢に対する政治史的研覈」、『法学研究』四十三巻十号、昭和四十五年)。三上隆三「貨幣の誕生 皇朝錢の博物誌」(朝日新聞社、平成十年)。

なお利光はその後『古貨幣夜話』(慶応通信、昭和五十八年)で、和銅以前の銀錢について、無文銀錢では造りが粗末すぎるとして、實行錢だと考えている。しかし現在では、無文銀錢が七世紀後半に存在していることが判明している、この見解は通用しない。

(14) 無文銀錢の鑄造方法については、酒井清治「錢貨鑄造技術の変遷について」(国立歴史民俗博物館『お金の玉手箱』、平成九年)参照。

(15) 無文銀錢の出土状況について纏めた最新のものとして、今村啓爾「無文銀錢と和同開珎銀錢」(『季刊考古学』七十八号、平成十四年)がある。

無文銀錢の出土状況を補説すると、飛鳥地方、近江大津宮周辺(琵琶湖湖西地域)、難波京(大阪・真宝院)など、都跡からの出土が目立つ。また古代の交通の要所(大阪・船橋遺跡)からの出土もあり、宮都に出入りする渡来人が中心になって銀錢を使用した可能性が考えられる。

(16) 先行研究では、阿部義平も、無文銀錢の発生が七世紀中葉に遡る可能性を指摘している。その論拠としては、無文

銀銭が大量出土した大阪真宝院が孝徳朝の難波京内であること、度量衡が舒明朝に革新されたこと、遣隋使や遣唐使といった外交制度の確立などをあげている。阿部義平「古代銭貨史の若干の話題と展望」(国立歴史民俗博物館「お金の玉手箱」平成九年)、「大川天顕堂コレクション」の古代の銀銭(『出土銭貨』九号、平成十年)。

(17) 銀銭の通貨機能否定説としては、近年では以下のものがある。東野治之「貨幣の日本史」(朝日新聞社、平成十一年)、「東アジアの中の富本銭」(『文化財学報』十九号、平成十三年)。三上隆三(前掲書、註(13)参照)。「三上善孝」「古代銀銭の再検討」(『出土銭貨』九号、平成十年)。「富本銭の史的意義」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』三十五号、平成十二年)。

銀銭の通貨機能否定説を最初に主張したのは東野である。厭勝銭機能が通貨機能に先行して定着する可能性を示唆した点で画期的で、三上隆三、三上善孝も東野の影響が強い。なお、和銅以前の銭貨の通貨機能を否定した場合、天武十二年貨幣令の解釈が問題となるが、東野はここに登場する銭貨も厭勝銭だとしている。それによれば、天武十二年貨幣令は、銀の資源確保のために銀銭を地鎮や副葬に際して使用することを禁止したもので、後続の乙亥条「用銀莫止」については、造銭以外での銀の使用を許可したのだという。しかし、『書紀』での「銭」の語義は、顕宗紀銀銭記事にみるように、厭勝銭に限定することはできない。

(18) 松村恵司「無文銀銭と和同銀銭」(『出土銭貨』九号、平成十年)。栄原永遠男「飛鳥池遺跡からみた七世紀後半の銭貨」(『ヒストリア』一六六号、平成十一年)。山尾幸久「飛鳥池遺跡と天武朝」(直木孝次郎・鈴木重治編「飛鳥池遺跡 富本銭と白鳳文化」『ケイ・アイ・メディア』平成十二年)。

(19) 天武天皇が、五行五徳思想の影響で自王朝を赤色と捉え、赤色を重用していたというのは通説であるが、これについて言及した先行研究としては、井上通泰「天武天皇紀關幽」(日本歴史地理学会「歴史地理」五四 三号、昭和四年)、坂本太郎「大化改新と壬申の乱」(『日本全史』2 古代 東大出版会、昭和三十五年)、直木孝次郎「持統天皇と呂太后」(三品彰英「日本書紀研究第一冊」塙書房、昭和三十九年)、村山修一「陰陽道の日本伝来と官制化」(『日本陰陽道史総説』塙書房、平成二年)、亀井輝一郎「近江遷都と壬申の乱」(『日本歴史』五五七号、平成六年)などがある。

(20) 栄原永遠男「和同開珎の誕生」(前掲論文、註(4)参照)。三上善孝(前掲論文、註(17))「古代銀銭の再検討」参照。

ともに銀銭の投入は、銅銭を浸透させるための一時的な施策と解釈している。ただし和同開珎銀銭について、栄原は通貨と見做し、三上は銭貨の厭勝銭から通貨への移行期の一段階だとしている。

- (21) 重量平均値は、今村啓爾『富本錢と謎の銀錢』(小学館、平成十三年)のデータ参照。
- (22) 栄原永遠男「日本古代の錢貨発行」(池亨編『錢貨 前近代日本の貨幣と国家』青木書店、平成十三年)。